

アラン・ケイのメッセージ

未来を拓く子どもたちを育てる教育について

事務局 榎 正昭

パソコン(以下PC)の父と呼ばれるアラン・ケイ(1940ー)が、昨年の夏、デジタル教科書の普及に取り組んでいる日本の団体に送ったメッセージがサイトで公開されている。彼はその中で、自身がそのアイデアに60年代からずっと興味をもっており、PCの技術そのものは進歩しているにもかかわらず、それが実行されるに至っていない理由を語っている。

彼は、まずPCを教育に導入する際のアメリカの失敗について述べる。それは、「100年間使っている古いメディアを、ちょっとした変種として載せようとした」ことだという。「古いメディア」とは、学校教育で使われている伝統的メディア、つまり教科書や掛図など、「ちょっとした変種」は、それをデジタル化してPCや電子黒板で提示すること、つまりデジタル教科書やデジタル掛図を指しているのであろう。

「アメリカには、教育というものが情報と事実の寄せ集めだという誤解がある。(中略) この誤解もまたデジタルメディアに持ち込まれ、多くの学校において間違ったアイデア、つまり雑多な事実を集めるには役に立つが、リテラシーを育むことには役立たない機器を教育に持ち込むことにつながっている」

アラン・ケイが考える教育のためのPCの使い方は、一般にイメージされるデジタル教科書やデジタル掛図とは全く違うようだ。デジタル教科書が授業に導入され、整理された情報が分かりやすく伝えられるようになったとしても、そのことが子どもたちの教育にとって何の役に立ったのだろうか、彼は問うている。

「教育は、未来の仕事に向けた準備のためにするべきで、過去の仕事に向けてではない。」「いま存在する多くの仕事やアイデアは、30年前には存在さえしなかった。30年前にその時点の社会に出るための準備をしていた人々は、今になって苦勞することになるのである。」

「未来の仕事に向ける準備」、彼は教育の目標をそう位置づけている。未だ表れていない課題に出会ったときに、それに対応できるように育てるということである。だから**「子どもは物を覚える以上のことをしなくてはならない」**と言う。ぶつかった現実について調査したり分析したり、そこから問題点を発見し、解決のための思考や実験、協力してプロジェクトを実施していく力、そういったものを意味していると考えられる。

それは、覚えていればできるというようなものではない。まさしく、現実にはぶつかり、調査分析し、思考し、行動することを通じて、その力を自分のものとするということだ。その実現のためには、子供が行動することを助けるためのカリキュラムやPCを含む教育機器の使い方の工夫、世界的なネットワーク化ができなくてはならないと彼は指摘する。

この教育に対する考え方、教育の方向に対する指摘は、まさに日本への警告だと考えてよいだろう。

JADEC ニュース83号(2011/3)より